

2.2 『比較文學研究』掲載歴代展覧会・カタログ評題目一覧

『比較文學研究』掲載歴代展覧会・カタログ評題目一覧（敬称略）

*2013年10月現在、全52本。

うち院生委員会推薦分は11本（題目の末尾に*を付す）。

なお、現在把握できる範囲で巡回展情報を掲載した。

第74号（1999年）

今橋映子 「薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち」展

徳島県立近代美術館（1998年10月17日～1998年12月6日）、

そごう美術館（1999年2月5日～1999年3月7日）、奈良そごう美

術館（1999年4月8日～1998年4月25日）

藤田みどり 「大ザビエル」展

東武美術館（1999年6月10日～1999年7月20日）、岡崎市美術博物館

（1999年9月11日～10月24日）

第75号（2000年）

中村和恵 「伝統と抽象—アジア系アメリカ人芸術家 1945-1970」展

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（1999年4月11日～1999年5月30日）、

福岡アジア美術館（1999年7月17日～1999年8月22日）、秋田市立千

秋美術館（1999年9月4日～1999年10月11日）

西槇偉 「東アジア／絵画の近代—油画の誕生とその展開」展

宇都宮美術館（1999年9月12日～1999年10月20日）

第76号（2000年）

稲賀繁美 「岡倉天心とボストン美術館」展

名古屋ボストン美術館（1999年10月23日～2000年3月26日）

内藤高 「近代京都画壇と『西洋』」展

京都国立近代美術館（1999年8月6日～1999年9月12日）

第77号 (2001年)

エリス俊子 「田中恭吉」展

和歌山県立近代美術館 (2000年4月15日～2000年5月21日)、町田市立国際版画美術館 (2000年6月3日～2000年7月9日)、愛知県美術館 (2000年7月15日～2000年8月27日)

小泉順也 「ラファエル・コラン」展

静岡県立美術館 (1999年9月10日～1999年10月24日)、福岡市美術館 (1999年10月30日～1999年11月28日)、島根県立美術館 (1999年12月4日～2000年1月16日)、千葉そごう美術館 (2000年2月9日～2000年3月5日)、愛媛県美術館 (2000年4月8日～2000年5月7日)、東京ステーションギャラリー (2000年5月27日～2000年7月2日)

第78号 (2001年)

平石典子 「ナビ派と日本」展

新潟県立近代美術館 (2000年9月15日～2000年11月5日)

藤岡伸子 「万国博覧会と近代陶芸の黎明」展

愛知県陶磁資料館 (2000年4月8日～2000年5月21日)、京都国立近代美術館 (2000年11月28日～2001年1月28日)

第79号 (2002年)

金森修 「日本の博物図譜」展

国立科学博物館 (2002年10月6日～2002年11月11日)

第80号 (2002年)

山屋真由美 「天上の青―瀧口修造の造形的実験」展

富山県民会館美術館 (2001年7月19日～2001年9月24日)、渋谷区立松濤美術館 (2001年12月4日～2002年1月27日)

永井久美子 「ネットワークが産んだ花鳥画―江戸の異国趣味 南蘋風大流行」展

千葉市美術館 (2001年10月30日～2001年12月9日)

上垣外憲一 「心の交流 朝鮮通信使」展

京都文化博物館 (2001年4月28日～2001年6月3日)

第 81 号 (2003 年)

李健志 「蚊帳の外—「2002 年ソウルスタイル 李さん一家の素顔の暮らし」展および「韓国大衆文化」展」

国立民族学博物館 (2002 年 3 月 21 日～2002 年 7 月 16 日)

新潟新津市美術館 (2002 年 2 月 8 日～4 月 7 日)、世田谷美術館 (2002 年 5 月 25 日～2002 年 7 月 14 日)、高松市美術館 (2002 年 8 月 2 日～2002 年 9 月 1 日)、福岡アジア美術館 (2002 年 11 月 21 日～2003 年 2 月 2 日)

沼野恭子 「極東美術研究の突破口—「極東ロシアのモダニズム 1918-1928」展」

町田市立国際版画美術館 (2002 年 4 月 6 日～2002 年 5 月 19 日)、宇都宮美術館 (2002 年 5 月 26 日～2002 年 7 月 7 日)、北海道立函館美術館 (2002 年 7 月 16 日～2002 年 9 月 1 日)

第 82 号 (2003 年)

鈴木禎宏 「「生活」を「芸術」として—西村伊作の世界」展

神奈川県立近代美術館鎌倉館 (2002 年 4 月 3 日～2002 年 5 月 19 日)、和歌山県立近代美術館 (2002 年 5 月 31 日～2002 年 7 月 14 日)

宮坂奈由 「ダンス! 20 世紀初頭の美術と舞踊」展

栃木県立美術館 (2003 年 2 月 9 日～2003 年 3 月 23 日)

第 83 号 (2004 年)

松井貴子 「カタログとしての書籍、書籍としてのカタログ—「明るい窓：風景表現の近代」展」

横浜美術館 (2003 年 2 月 1 日～2003 年 3 月 30 日)

西原大輔 「韓国国立中央博物館所蔵 日本近代美術」展

東京藝術大学大学美術館 (2003 年 4 月 3 日～2003 年 5 月 11 日)、京都国立近代美術館 (2003 年 5 月 20 日～2003 年 6 月 29 日)

西槇偉 「小山正太郎と「書ハ美術ナラス」論争の時代」展

新潟県立近代美術館 (2002 年 10 月 4 日～2002 年 11 月 17 日)

第 84 号 (2004 年)

山中由里子 「アレクサンドロス大王と東西文明の交流」展

東京国立博物館 (2003 年 8 月 5 日～2003 年 10 月 5 日)

大澤吉博 特別展「江戸大博覧会—モノづくり日本」

国立科学博物館 (2003 年 6 月 24 日～2002 年 8 月 31 日)

李健志 「平常展と企画展—韓国の中の二つの展覧会から」

第 85 号 (2005 年)

徳盛誠 「21 世紀の本居宣長」展

川崎市市民ミュージアム (2004 年 9 月 18 日～2004 年 11 月 7 日)、四日市
市立博物館 (2004 年 11 月 16 日～2005 年 1 月 10 日)

大嶋仁 「チャイナ・ドリーム」展

兵庫県立美術館 (2004 年 7 月 24 日～2004 年 8 月 29 日)、福岡アジア美
術館 (2004 年 9 月 4 日～2004 年 10 月 17 日)、新潟県立万代島美術館 (2004
年 10 月 23 日～2004 年 12 月 5 日)

内藤高 「万国博覧会の美術」展

東京国立博物館 (2004 年 7 月 6 日～2004 年 8 月 29 日)、大阪市立美術館
(2004 年 10 月 5 日～2004 年 11 月 28 日)、名古屋市博物館 (2005 年 1
月 5 日～2005 年 3 月 6 日)

第 86 号 (2005 年)

佐藤宗子 「ピノッキオ—その誕生から現代まで」展

高松市美術館 (2004 年 4 月 9 日～2004 年 5 月 9 日)、呉市立美術館 (2004
年 5 月 15 日～2004 年 6 月 27 日)、和歌山県立近代美術館 (2004 年 7 月
18～2004 年 9 月 23 日)、おかざき世界子ども美術博物館 (2004 年 10 月
2 日～2002 年 11 月 28 日)

小林将輝 「フルクサス」展*

うらわ美術館 (2004 年 11 月 20 日～2005 年 2 月 20 日)

第 87 号 (2006 年)

前島志保「アジアのキュビズム：境界なき対話」展*

東京国立近代美術館 (2005 年 8 月 9 日～2005 年 10 月 2 日)、徳寿宮美術館 (韓国、2005 年 11 月 11 日～2006 年 1 月 30 日)、シンガポール美術館 (2006 年 2 月 18 日～4 月 9 日)

坂本輝世「アラビアンナイト大博覧会」展

国立民族学博物館 (2004 年 9 月 9 日～2004 年 12 月 7 日)

西川正也「ジャン・コクトー展—サヴァリン・ワンダーマン・コレクション」

北海道立近代美術館 (2005 年 4 月 19 日～2005 年 5 月 29 日)、日本橋三越本店新館 7F ギャラリー (2005 年 7 月 20 日～2005 年 7 月 31 日)、山梨県立美術館 (2005 年 8 月 6 日～2005 年 9 月 7 日)、大丸ミュージアム KOBE (2005 年 9 月 14 日～2005 年 9 月 26 日)、岩手県立美術館 (2006 年 4 月 8 日～2006 年 5 月 21 日)

第 88 号 (2006 年)

陳岡めぐみ「Alternative Paradise—もうひとつの楽園」展

金沢 21 世紀美術館 (2005 年 11 月 5 日～ 2006 年 3 月 5 日)

曾我晶子「ベルリンと東京—都市と文化の遠近法」展*

森美術館 (2006 年 1 月 28 日～2006 年 5 月 7 日)、ベルリン新国立美術館 (2006 年 6 月 8 日～10 月 3 日)

第 89 号 (2007 年)

手島崇裕「マンダラ展—チベット・ネパールの仏たち」展

国立民族学博物館 (2003 年 3 月 13 日～6 月 17 日)、名古屋市博物館 (2004 年 4 月 10 日～7 月 4 日)、埼玉県立近代美術館 (2006 年 7 月 8 日～9 月 24 日)

今野喜和人 「詩人の眼・大岡信コレクション」展

三鷹市美術ギャラリー (2006 年 4 月 15 日～2006 年 5 月 28 日)、静岡・グランシップ (2006 年 8 月 3 日～2006 年 8 月 28 日)、福岡県立美術館 (2006 年 11 月 8 日～2006 年 12 月 10 日)、足利市立美術館 (2007 年 2 月 10 日～2007 年 3 月 25 日)

第90号(2007年)

安藤智子 「イメージの迷宮に棲む 柄澤斎 展—「一冊の本」としての展覧会、そして「一冊の本」の記憶としての展覧会カタログ」*

神奈川県立近代美術館 鎌倉 (2006年10月28日～2006年12月24日)

佐藤温 「近代文人のいとなみ」展

成田山書道美術館 (2006年11月3日～2006年12月23日)

伊藤由紀 「森鷗外と美術」展

島根県立石見美術館 (2006年7月14日～2006年8月28日)、和歌山県立近代美術館 (2006年9月10日～2006年10月22日)、静岡県立美術館 (2006年11月7日～2006年12月17日)

第91号(2008年)

前島志保 「アジアのキュビズム」ソウル展

韓国 国立現代美術館 徳壽宮美術館 (2005年11月11日～2006年1月30日)

深見麻 「大正シック」展*

東京都庭園美術館 (2007年4月14日～2007年7月1日)、尼崎市総合文化センター (2007年7月28日～2007年8月26日)、静岡県立美術館 (2007年9月8日～10月14日)、尾道市立美術館 (2007年10月20日～12月16日)

第92号(2008年)

佐藤光 「青山二郎の眼」展

MIHO MUSEUM (2006年9月1日～2006年12月17日)、愛媛県美術館 (2007年1月26日～2007年3月4日)、新潟市美術館 (2007年4月6日～2007年5月13日)、世田谷美術館 (2007年6月9日～2007年8月19日)

李健志 「文化的記憶—柳宗悦が発見した朝鮮と日本」展

韓国 一民美術館 (2007年11月10日～2007年2月25日)

第 93 号 (2009 年)

林久美子「パリへー洋画家たち百年の夢」展と「黒田から藤田へーパリの日本人画家」展*

東京藝術大学大学美術館 (2007 年 4 月 19 日～2007 年 6 月 10 日)、新潟県立近代美術館 (2007 年 6 月 23 日～2007 年 8 月 5 日)、MOA美術館 (2007 年 8 月 17 日～2007 年 9 月 30 日) / パリ日本文化会館 (2007 年 10 月 24 日～2008 年 1 月 26 日)

第 94 号 (2010 年)

川島健「十二の旅ー感性と経験のイギリス美術」展*

栃木県立美術館 (2008 年 4 月 27 日～2007 年 6 月 22 日)、静岡県立美術館 (2008 年 9 月 12 日～10 月 26 日)、富山県立近代美術館 (2008 年 11 月 2 日～12 月 23 日)、世田谷美術館 (2009 年 1 月 10 日～3 月 1 日)

西田桐子「沖縄・プリズム 1872-2008」展*

東京国立近代美術館 (2008 年 10 月 31 日～12 月 21 日)

第 95 号 (2010 年)

大嶋仁「未来をひらく 福澤諭吉展」について

東京国立博物館 表慶館 (2009 年 1 月 10 日～2009 年 3 月 8 日)、福岡市美術館 (2009 年 5 月 2 日～2009 年 6 月 14 日)、大阪市立美術館 (2009 年 8 月 4 日～2009 年 9 月 6 日)、神奈川県立歴史博物館 (2009 年 8 月 22 日～2009 年 9 月 23 日)

吉岡知子「躍動する魂のきらめきー日本の表現主義」展*

栃木県立美術館 (2009 年 4 月 26 日～2009 年 6 月 15 日)、兵庫県立美術館 (2009 年 6 月 23 日～2009 年 8 月 16 日)、名古屋市美術館 (2009 年 8 月 25 日～2009 年 10 月 12 日)、岩手県立美術館 (2009 年 10 月 20 日～2009 年 11 月 29 日)

第96号 (2011年)

定村来人「江戸の粹・明治の技 柴田是真の漆×絵」展*

三井記念美術館 (2009年12月5日～2010年2月7日)、相国寺承天閣美術館 (2010年4月3日～2010年6月6日)、富山県水墨美術館 (2010年6月25日～2010年8月22日)

寺田寅彦「フランスの浮世絵師 アンリ・リヴィエール」展

石川県立美術館 (2009年7月24日～2009年8月23日)、神奈川県立近代美術館 葉山 (2009年9月5日～2009年10月12日)、

第97号 (2012年)

水野太朗「異色の芸術家兄弟：橋本平八と北園克衛」展*

三重県立美術館 (2010年8月7日～2010年10月11日)、世田谷美術館 (2010年10月23日～2010年12月12日)

堀江秀史「映像と展覧会：第三回恵比寿映像祭の試み」

東京都写真美術館その他 (2011年2月18日～2011年27日)

2.3 院生委員による展覧会・カタログ寸評精選集

委員会ブログ掲載展覧会寸評精選集（全54本のうち8本）

http://www.todai-hikaku.org/bb/exhibition_all.html

目次

1. [寸評]「揺らぐ近代——日本画と洋画のはざまに」展 評者：永井 久美子
2. [寸評]氾濫するイメージ 反芸術以後の印刷メディアと美術 1960's-70's
評者：佐々木 悠介
3. [寸評] 東京スカイツリー完成記念特別展「ザ・タワー～都市と塔のものがたり～」
評者：伊藤 由紀
4. [寸評]第三回恵比寿映像祭 評者：堀江 秀史
5. [おすすめ]殿様も犬も旅した 広重・東海道五拾三次 保永堂版・隸書版を中心に
評者：林 久美子
6. [寸評]サラ・リプスカ —巨匠の影に 評者：松尾 梨沙
7. [寸評]奇跡のクラーク・コレクション—ルノワールとフランス絵画の傑作
評者：實谷 総一郎
8. [寸評] ルーヴル美術館展—地中海 四千年のものがたり— La Méditerranée dans les collections du Louvre 評者：岩瀬 慧

[寸評]「揺らぐ近代——日本画と洋画のはざまに」展

- ・会期：2006年11月7日～12月24日
- ・会場：東京国立近代美術館
- ・評者：永井 久美子

まず、展示作品の質がとても高いことが注目されます。近代絵画の歴史を考えらううえで頻繁に言及されてきた作品と、「日本画」「洋画」というジャンル分けに適さないがゆえに議論から外されがちであったと思われる作品の両方が、一堂に会していました。

注目は、やはりボストン美術館の小林永濯作品であると思われます。他にも《加藤清正武将図》など、国内の小林作品も出品され、小林永濯再考のよい機会ではなかったかと思います。

全体の展示の流れも、これまでの日本近代美術の議論をふまえた構成となっており、分かりやすいものであったと思われます。本展の位置づけを確認するためにも、カタログに参考文献一覧が 付されていれば、より明解であったのではないかと感じました。

カタログでは、作品自体の解説や文献の紹介よりも、作者の人物紹介に重点が置かれている印象がありましたが、本展は、人物研究という意味でも 作品の選び方が大変興味深いものであったと思われます。例えば横山大観の《迷児》や浅井忠の《鬼ヶ島》など、一般的に「日本画家」と考えられている人の「洋画」、「洋画家」と考えられがちな人の「日本画」が並び、作者も簡単にジャンル分けできるものではないことが、会場でも一目で分かるように示されていたと思います。

なお、今回のカタログ及び会場のパネルのテキストを通して、本展で取り上げられた作品をどう語るか、そのことばの問題の難しさを感じました。例えば、狩野芳崖の作品を語るにあたり、伝統的な「日本画」にはなかった顔料が云々と論じると、芳崖の時代にすでに「日本画」というジャンルが確立していたかのように解されてしまうが、ではどのように語ればよいのか。また、「日本的な油絵」「日本的な洋画」といったとき、「日本的」というものは具体的にはどのようなものを前提に考えるべきなのか。

これらのことばの難しさは、単なる語彙の問題ではなく、ジャンル分けしにくいものの扱いにくさ、その扱いにくいもの、すなわちジャンル分けされた結果、見落とされがちであったものをどう語るのかという困難さを示していると思われます。本展は、ジャンル分けがもたらした問題を、具体例をもとに浮き彫りにした機会でもあったと思われます。

(2007年1月12日投稿)

[寸評] 氾濫するイメージ 反芸術以後の印刷メディアと美術 1960's-70's

- ・会期：2008年11月15日～2009年1月25日
- ・会場：うらわ美術館
- ・評者：佐々木 悠介

うらわ美術館で開催中の「氾濫するイメージ 反芸術以後の印刷メディアと

美術 1960's-70's」展を観てきました。

いろいろ珍しいものを見られる、というのが第一印象です。雑誌の表紙はまだしも、ポスターのようなものは古くなればなるほど、なかなか良い状態で保存されたものを観る機会もないですし、そういう媒体で発表されるアート作品が、その時代の芸術潮流のある側面を確かに現している、という想定（主催者の意図は、つまるところそういうことではないかと思うのですが）はやはり大切なことに思われます。

カタログは、担当学芸員の森田一さんによる解説的(?)な論文一つと、展示図版、年譜や参考文献からなっており、面白い図版が載っているののでいちおう買ってみました(1800円)が、論文はもの足りなく感じました。このような多様な方向性を持った題材であれば、複数の論文が並べて載せられて、異なった視点からの分析が欲しかったというのが一つと、しかしおそらくこの展覧会の構成では、上述の解説的な一本以外は書きようがなかったであろう、というのが一つです。

というのは、この展覧会は印刷メディアというものに目を付けていながら、それらの媒体で図版と同じ程度の重要性を持ち、なおかつ図版との間に相互的な記号作用を持っているはずの文字テキストのほうには、実はほとんど注意を払っていないからです。担当学芸員の論文では「イメージに焦点を当て」ることが再三強調されていますが、印刷メディアのアート作品を考察する上で、これはすでに無理のある前提です。また論文中、〈複製芸術〉とか「イメージの大衆化」といった概説のほうにかなりのページ数が割かれ、なぜこの展覧会で8人の作家を選んだのか(約30名の候補の中から絞ったということですが)、ということに関する説明は十分ではない。それはおそらく説明しようがないからでもあります。そのような構成の展覧会で、たとえば外部の研究者の論文は、書きようがないかも知れません。印刷メディアのアートという重要なものを取りあげ、しかもこれだけの数の(通常では手に入りにくい)作品を集めた展示とカタログは、資料としても貴重であり、それだけでもこの展覧会・カタログの意義は充分にあると思います。しかし同時に、印刷メディアのアートというものを考え、分析する視点はまだまだプリミティブなものかもしれません。会期は1月25日までです。

(2008年11月29日)

〔寸評〕東京スカイツリー完成記念特別展「ザ・タワー～都市と塔のものがたり～」

- ・会期：2012年2月21日（火）～2012年5月6日（日）
- ・会場：江戸東京博物館
- ・評者：伊藤 由紀

2月20日に開催された内覧会に行ってきました。1Fホールで行われた開会式は、竹内誠館長の挨拶、主催・後援等の紹介、PRキャラバン隊「えどはくタワーズ」によるパフォーマンス、常設展示室に設置された「太陽の塔 黄金の顔」の紹介、と続きました。「黄金の顔」の3日間の設置作業を、定点カメラの早回し映像で見せていただいたのが面白かったです。

企画展は全5章構成。プロローグ「二つの塔」ではバベルの塔と仏塔を、第1部「都市の塔の誕生前史」では江戸～明治前半期の鳥瞰図と展望施設を、第2部「近代都市の塔と万博」ではエッフェル塔と浅草十二階（凌雲閣）と初代通天閣を、第3部「新しい時代の塔」では東京タワーと現在の通天閣を、エピローグ「塔が生まれるとき」では東京スカイツリーを、それぞれ取り上げています。

私としては浅草十二階を目当てに見に行ったのですが、意外にその前史の部分が面白かったです。アポリネールのカリグラムよりずっと緻密な「300行からなる300メートルのエッフェル塔」（cat. no. 66）が、エッフェル塔完成のその年に早くも書かれて（描かれて？）いるのには驚きました。

その他にも、建設中の定点写真（cat. no. 62）、ペーパークラフト（cat. no. 69）、双六（cat. no. 73）、世界の建造物を一堂に集めた高さ比べの図（cat. no. 49）など、現代でも定番の塔表象のあらかたが、エッフェル塔の時点ですでに登場しています。ただ、日本の双六（cat. no. 46, 119, 142など）が塔の頂点を文字通りの「上がり」とするのに対し、エッフェル塔のそれは頂点で折り返して地上に戻ったところがゴール、というのは面白いですね。家に帰るまでが遠足です。

双六つながりで、これは笑えない……と思いつつも、ちょっと分かる気がしたのが「大正大震災双六」（cat. no. 165）、震災の翌年の発行です。ふり出しのコマの名前は「ゆり出し」で、サイコロの目に従って「上野公園」「被服廠」などの避難場所に行き、「バラック」「仮住居」などを経て「生命 財産 安全」と書かれた上りを目指します。どの避難場所に逃げた後も、サイコロの目によっては

「死亡」で終わってしまう可能性があるのが厳しいです。

この出品をはじめ、十二階の震災による炎上（大正12年9月1日）とその後の爆破（同23日）を取り上げた一連の展示は、いま見ると重いものでした。爆破を見ていた人々がつい「万歳」と口にして「どつと笑った」、というエピソードを伝える川端康成『浅草紅団』の一節がパネルで引用されていましたが、3・11後のあの奇妙な昂奮状態を経験したいま読み返すと、このエピソードも何か妙に腑に落ちます。

ただ、震災の話題がアクチュアルすぎて、建設当初の輝いていた頃の十二階の印象はいまいち薄れてしまったように思います。浅草オペラへの言及が特になかったことも個人的には残念でしたが、順路の後のほうで思いがけず関連資料を見つけました。通天閣のビリケンさん（cat. no. 279）に関する出品の中に、ビリケン到来当時のブームを伝える資料として、東京歌劇座のお伽歌劇《ビリケンとキューピー》のプログラム（cat. no. 282-283）が含まれていたのです。大正6年11月の日本館での公演は、ビリケン杉寛、キューピー澤モリノ、主役級らしき少女二人が天野喜久代に河合澄子という豪華キャスト。

会場の展示方法については、また双六の話で恐縮ですが、紙をめくると建物の内部が見える（cat. no. 119）、気球乗りのスペンサーの姿が見える（cat. no. 142）などのギミックが、閉じられた状態のまま展示されていたのは残念でした。せめて開いた状態の参考図版があれば（カタログには掲載）。音声ガイドには、通常のお堅い解説のほかに、別トラックで山田五郎氏のコラムが収録されています。

カタログはA4版208ページ。出品作品の図版のほか、担当学芸員の岩城紀子氏（江戸東京博物館）、船越幹央氏（大阪歴史博物館）の短い論文、細馬宏通氏（『浅草十二階 塔の眺めと〈近代〉のまなざし』）、橋爪紳也氏（『明治の迷宮都市』）など、納得の人選によるエッセイを収録しています。

大阪歴史博物館に巡回（5月23日～7月16日）。

（2012年2月22日）

[寸評]第三回恵比寿映像祭

- ・会期：2011年2月18日～2月27日
- ・会場：東京都写真美術館
- ・評者：堀江 秀史

東京都写真美術館にて現在開催されている映像祭に行ってきました。美術館全体が解放空間になっていて(無料で入れます！ 但し、一階映画館の上映作品を観るにはお金がかかります)、三階から展示がスタートします。

三階は、映像表現の様々な可能性を探求した芸術=実験的な作品が主でした。昨年カンヌでパルム・ドールを受賞したアピチャップン・ウィーラセクタン(受賞作は『ブンミおじさんの森』、3月5日渋谷シネマライズにて公開)の映像がまず最初に飾ってあり、劇映画の他、こうした実験的映像も作っているのかと、感心しました。その他、映像として興味深かったのは、太極拳を舞う白髪の男性が、その動きに合わせて徐々に横に伸びていく(言葉では伝わりにくくてすみません。もっともだからこそ、映像としておもしろいと思うのですが。カタログ掲載の写真を見れば、だいたいは掴めます)、ダニエル・クルックス《動きの中に静寂を求め》です。他に《走る男》(ルームランナーで走る若者が、同様に横に広がっていくもの)も展示されていますが、やはり前者の方が、ゆったりとした太極拳の動きと映像加工の緩慢な速度がマッチしている点で、面白いものだったと思います(《走る男》はスローモーションに加工した映像をさらに加工するものだったと記憶しています)。コンセプトとして興味深いのは、ダヴィッド・クレルボの《幸福なモーメントの諸断面》。静止画の映像の数々が、デジタル・フレームのように、巨大なスクリーンに一定時間ずつ映しだされていきます。特異な点は、作品に付された解説にもありますように、それらの静止画が、同一の時空での出来事(マンションに囲まれた中庭で、昼間陽が射すなか、子供たちがボール遊びをする。それを大人たちが見守る。ボールはちょうど放物線の頂点あたりにあり、皆の視線はそこに集中している)を様々な角度から写していること。そして、同一時空であるならば、別の視点から写せば撮影者の姿が写真に写り込んでいるはずなのに、それらの写真には撮影者が一切写り込んでいないことです。同一の時空であることへ観る側の意識を寄せさせるのは、空中で静止したボールと、光によって生じる影の角度、この二点でしょうか。このことに気づくと、違和感が生じ、「ある種暴力的な視線を彼(彼女)らに注ぐことになって

しまう」(カタログ及び当日のパネルより) わけです。「暴力的な視線」とは、映像の謎解き、つまりはあら探し、のことでしょう。撮影者が写っていないのならばシチュエーションを綿密に規定した上で、同じことを繰り返し行って何度も撮影したに違いない。ならば、表情やしぐさには、どんなに頑張っても、微妙な差異があるはずだ。その証拠を探し出してやれ。という思考の流れにそって、鑑賞者は、その、穏やかな日常の光景という写真内容を通り越して、あどけない少女の顔のアップ写真にすら、少女の顔をみるのではなく、前の写真との差異を見つけだそうとしてしまう。しかし、それは一定時間ずつ映し出されては消えていくので、決定的な証拠を見つけだすには時間が足りない、あるいは多すぎる(前の写真の記憶をなくさないようにするためには、少々長すぎる)。または、アルバム写真のように、前のページに戻ってじっくり観たいという欲求にかられる。時間とともに流れゆく映像はリニアで、観る側にそのような自由を渡してはくれない。観る側は余計にいらいらしながら、目の前の静止画が移ろいゆくさまをただ観ているだけ。解説には、作者は「作品の長さや編集のテンポ、音響効果、鑑賞環境など、観客の体験を左右する諸要素を厳密に設計する」とあるので、こうした「いらいら」は、全て織り込み済みであり、この作品には、極めて完成されたコンセプトが凝縮されていると云えます。写真に対する問題提起のほか、ユーザーにとってのデジタルとアナログの問題(デジタル書籍と紙媒体など)の融合された、大変面白い作品でした。

二階は、意識下の映像化をコンセプトとした作品が多かった気がします。マニュアルな作業で作られるアニメーションの、制作に使われた(あるいはその過程で生まれた)美術品の展示が主ですが、内容的なテーマとしては三階よりも二階に近い映像作品も三本(スーパーフレックス、水越香重子、ハヴィア・テレーズ)、上映されていました。スーパーフレックスの作品は、無人のマクドナルドが徐々に水で埋まっていく過程が、おそらく各所に置かれた定点カメラ(水によってそれぞれがだんだんぷかぷかと揺れ動くのですが)によって記録され、それらが編集されたものです。世界に何が起こったのか、人々はどこへ行ったのか、等々、そこには一切の説明がありませんが、映画の予告編、あるいはオープニングを観ているような、高密度な期待感、緊張感が持続していく、不思議な作品でした。

二階から地下一階の展示への移動は、エレベーターではなく階段をお勧めします。しりあがり寿の『白昼夢夫人』が小型スクリーンで階段の随所に並べてあ

るからです。白黒で3分程度の各作品は、モダンな洋館で昼寝をする夫人がナンセンスな夢をみる、というのですが、ほのかなエロティシズムとナンセンスが混淆して、非日常への橋渡しの役割を果たします。

これらを見ながら、辿りつく地下一階の展示室では、まず最初に、同じくしりあがり寿の「ゆるめ～しょん」シリーズ作品が小型スクリーンに映し出すかたちで幾つも並べられています。薄暗い照明の中、天井からベールを垂らして、その中に各スクリーンを閉じ込めており、映像の光がベールを照らしてその部分をぼうっと浮かび上がらせる、『竹取姫』のお姫様の登場シーンのようなことになっています。近づけば、その中にいるのが「おじさん」である点も、落差があって面白い。文字通り（今回の映像祭のタイトルは、「デイドリーム・ビリーバー！！」です）、白日夢空間へと迷い込んだ感があります。その他ここでは、社会と映像との接点を捉える作品の展示があります。ネットへの匿名投稿における主婦の言葉を女優が語る森弘治の《Re:》、ネット内空間「セカンド・ライフ」を使ったツアオ・フェイの《RMB》。最後には、米軍のバーチャル映像を使った軍事訓練を扱ったハルン・ファルッキ《シリアスゲーム》。

映像は夢を現実化した表現である、というコンセプトに沿って、テクノロジー的な側面から始まり（三階）、意識の底をえぐるような映像の力にも焦点をあて（二階）、展示が進むごとに映像によって夢と現実の境界があいまいになっていく（二階～階段～地下一階）。かといって、それは芸術の問題だけに止まってはいない。社会的、政治的な利用もされる（地下一階）。それを批評的な眼差しで捉えるのもまた、映像である（《シリアスゲーム》のように）。このような流れが、随所に凝らされた工夫でじわじわと浮かび上がってくる展示でした。

報告の最後に要望を二点。レセプションでは、二階の吹き抜け空間で、恵比寿駅と逆側のエントランスを背にして、開催の辞が述べられたほか、今回出品されているアーティストの方たちの紹介がありました。これまでも何度かこちらの内覧会には伺わせて頂きましたが、毎回大変な混雑で、肝心の、挨拶をされる方々がわれわれと同じ高さの床に立っておられるため、姿が見えないことが多いです。本当に簡単なものでも良いので、ちょっとした舞台（例えば、しりあがり寿さんがピンク地に黒文字というスタイリッシュな映像祭パネルの前で、仮にビールケースをひっくり返して壇としてご挨拶されていたら、とても恰好良かったのではと思います——冗談でなく）をしつらえてもらえれば、遠目からでもお顔が拝見できるのですが。

もう一点、先日、今一度観覧に行ったのですが、そのときは同じ場所でアーティストの方がラウンジトークをされていました。それほど混雑もなく、ラウンジに用意された椅子に座って聞かせて頂けたのですが、せつかくのお話なのに、吹き抜けの場所だからか、正面の椅子に座っているとマイクの声が拡散して聞きづらいという難点がありました。三階にもスピーカーが設置してあり、その声を聞けるようになっているのですが、そちらで聞いた方がよっぽど聞き取りやすい。これはもうひとつ、残念なこととして挙げておきたいと思います。

写美から出てすぐ、ガーデンプレイスの中庭あたりでは「オフサイト展示」もされているほか、チェコ・センター、日仏会館などとタイアップして様々なイベントが開催されているようです（詳しくは写美にある映像祭のチラシをご参考ください）。カタログ、展示は全て日本語と英語の二ヶ国語表記です。カタログは、展示のみならず、オフサイト展示、上映映画、イベント全てのカタログを兼ねています。ここでは紹介できませんでしたが、一階映画館上映の映画も貴重なものばかり、もうあと少ししか時間ありませんが、チケットが売り切れてなければ、観賞をお薦めします。

写美での映像祭は今週末までで終了しますが、お時間があえば是非、この楽しいお祭りを観にいらしてください。

※ここでご紹介した作品名は、簡略化したものもあります。正確な情報はカタログをご覧ください。

(2011年2月25日)

[おすすめ] 殿様も犬も旅した 広重・東海道五拾三次 保永堂版・隸書版を中心に

- ・会期：2011年12月17日～2012年1月15日
- ・会場：サントリー美術館
- ・評者：林 久美子

投稿が遅くなってしまいましたが、サントリー美術館、広重展の内覧会に行ってきました。本展では、歌川広重の代表作《東海道五拾三次之内》(天保4(1833)年頃制作、一般に「保永堂版東海道」と、およそ15～20年後に再び広重によって描かれた《東海道》(画中の題が隸書で書かれている「隸書版東海道」)が一挙に公開されています。

江戸日本橋から京都までの55カ所、全ての宿場の「保永堂版」と「隸書版」が並べて展示され、両者の違いを如実に見て取ることができます。同じ場所でありながら、構図や色味、モチーフなどに様々な違いが見られ、広重の工夫の跡が伺えます。また、「保永堂版」と「隸書版」の比較に加えて、刊行当初の〈初摺〉と、後に摺り方などが変えられた〈後摺〉との比較や、〈初版図〉と、図柄が一部変えられた〈変わり図〉の比較が行われている宿場もありました。

「保永堂版」の〈蒲原 夜之雪〉や〈庄野 白雨〉などは、誰もが一度は目にしたことがある広重の代表作だと思いますが、今回の比較展示により、実は「隸書版」の方が、実際の風景により即したものであったことを知り、驚きました。

所々に配された、名所をモチーフとした屏風や工芸品を除けば、ひたすら浮世絵の展示が続き、一見単調にも思える本展ですが、実際は江戸期の旅の様子が生き生きと描かれた作品に導かれて、私もまるで旅をしているような気持ちになりました。

年末年始、旅行に行く余裕がないという方は、六本木で東海道旅行を楽しむというのはいかがでしょうか。

(2011年12月21日)

[寸評]サラ・リプスカ 一巨匠の影に

- ・会期：2012年8月19日(日)～2012年11月4日(日)
- ・会場：ワルシャワ国立美術館 (クルリカルニャ)
- ・評者：松尾 梨沙

ポーランドの首都ワルシャワには、美しい宮殿がいくつか点在しています。中心から南方5km程のところにある、クルリカルニャ (Królikarnia、もともとここでウサギ (królik) 狩りが行われていたことに由来) という宮殿もその一つですが、ここは現在、ワルシャワ国立美術館の分館 (ドゥニコフスキ記念彫刻美術館) として機能しています。周辺は広々とした庭園となっており、「黄金の秋」といわれるこの時期には、見事な紅葉でとりわけ美しい空間となります。ただいまここで開催中の展覧会「サラ・リプスカ 一巨匠の影に」に行ってみました。

サラ・リプスカ (Sara Lipska, 1882-1973) はポーランド北東のムワヴァ (当時ロシア領) という町で生まれ、後にパリで活動したユダヤ人女性芸術家です。当初、その頃女性としては難関だった彫刻家を目指して、ワルシャワ美術学校に入学しますが、そこで当時教鞭を執っていた、のちのポーランド彫刻界の巨匠クサヴェリ・ドゥニコフスキ (Xawery Dunikowski, 1875-1964) に、その感性と美貌を見初められます。二人の親交は彼が亡くなるまで続きますが、法的な婚姻関係を結ぶことはなく、サラは彼との間にもうけた娘とともに、1912年よりパリのモンパルナスに移り住みました。

以降、彫刻、絵画、インテリアデザイン、劇場の装飾、服飾、ポスターデザイン、挿絵など、あらゆる分野で作品を遺し、またディアギレフやヘレナ・ルビンスタイン、ポール・ポワレらとのコラボでも活躍しました。昨年パリのポーランド図書館 (Bibliothèque Polonaise de Paris) では彼女を取り上げた展覧会が行われましたが、これまでポーランド国内で彼女の活動は事実上知られておらず、今年はワルシャワ国立美術館 150周年を記念し、フランス大使館などの後援も得て大きく取り上げられることとなったようです。

展示作品数はそれほど多くありませんでしたが、上述の通り様々なジャンルの展示がありました。油彩では、しなやかなラインと明るい色調がマティスを想わせるところもあり、とくに鳥と植物のモチーフが目を引きまします。

服飾デザインにおいても、比較的ゆったりとしたフォームに、やはり花のモチーフが顕著です。また、メシアン《異国の鳥たち》の音楽をもとにしたバレエ

の衣装が企画されたこともあり、あらゆる鳥の衣装デザイン（水彩画）が遺されていたことから、やはり鳥と花は、彼女にとって主要なモチーフであり続けたように思いました。鳥の衣装デザインにおける、翼や羽の色彩感と曲線美は、その他のジャンルにおける彼女特有の描き方にも通じるところを多く感じます。

彫刻でも、角張ったデザイン性のあるドゥニコフスキの作品に対して、リプスカは細かい曲線まで描き出し、実に写実的です。とくにアルトゥール・ルービンシュタインの頭像は、肌の質感やたるみ方まで驚くほど良く表現され、まるで本人そのものです。

芸術のジャンルは幅広い一方で、一つのジャンルに優れる人は、他の方面でも劣らぬ才能を見せるものだと、最近つくづく思います。以前ここで取り上げた村山知義も、国は違うもののリプスカとほぼ同時代で、やはり非常にマルチに活躍した人でした。こうした傾向が時代特有のものかどうか、私にはわかりかねますが、両者とも全ジャンルに共通する独自性を感じさせてくれるのは、非常に興味深い点です。こんな感じで、日本で出会えない芸術家の軌跡を辿る機会が、私の留学の楽しみを一つずつ増やしてくれています。

カタログはA4版、232頁。前半にポーランド語とフランス語による解説、後半に図版と、分けてまとめられています。むしろ図版一つ一つにもう少し詳細な解説を付けて欲しかったです。展覧会は11月4日で終了となります。

(2012年11月1日)

[寸評]奇跡のクラーク・コレクション—ルノワールとフランス絵画の傑作

- ・会期：2013年2月9日（土）～5月26日（日）
- ・会場：三菱一号館美術館
- ・評者：實谷 総一郎

クラーク・コレクションはミシン製造会社 I. M. シンガーミシンの共同設立者の孫、ロバート・スターリング・クラークとパリのコメディ・フランセーズの女優だったフランシーヌが二人で蒐集したコレクションだ。夫妻のコレクションをもとに1955年に設立されたクラーク美術館は、研究所や教育機関を付設し、世界中の学生や研究者の注目を集める重要な視覚芸術の総合施設となっている。30点のルノワールの作品がとくに有名なクラーク・コレクションだが、これまで館を離れまとまって紹介されることがなかった。今回は、2010年から始まった改修工事に合わせ、作品を各国に巡回させる企画が立ち、日本でも開催されることとなったのである。展示作品数73点のうち日本初公開が59点、アメリカ旅行のついでに気軽に行けるような立地にない美術館であることも考えると、大多数の人にとって今回を逃すと一生見る機会がないと思われる作品が多い。

本展はコレクション展の部類に入るが、作品の質が高く名品展の性質も有する。そうした展示にふさわしく、美術館の側から特定の方向付けが行われることはなく、バルビゾン派からポスト印象派までのゆるやかな年代順の配置と主題やテーマの親近性による自然な整理があるのみとなっている。各作品の個性に任せ、また鑑賞者の自由な見方に任せる展示である。身体表現など特定のものに意識を向けたり、一つの作品をじっくり見たり、画風を比較したりと、各画家の個性が集中する名品の多い本展は多様な見方を誘発する。とくに数の多かったルノワールの作品はやはり、画面に膜が張ったような独特なトーンによって際立って見えた。それはとりわけ《フルネーズ親父》や《シャトゥーの橋》で感じられた。その中で、この膜がない青年期の自画像は異質に見えた。横にある老年期の自画像が他の絵と同様のトーンで描かれているのを見ると、画家と自身の様式との複雑な関係が想像され、興味深かった。

美術館の側からの全体的な方向付けはない一方で、個人コレクションならではの蒐集家の趣味が一定のカラーとして表れてもいる。ルノワールの絵画と言えば、時に暑苦しいほど暖色を用い、印象派らしく輪郭をあいまいにしたものが多いが、展示品ではそれとは反対に温度の低く、より鮮明な作品が多いように思

った。こうした特徴はルノワール以外の作品にも見られ、実際、海、川、雨、花瓶といった水が関わる作品や青の美しい作品が強く印象に残っている。ジャン＝レオン・ジェロームの《蛇使い》はそうした傾向の一つの典型かもしれない。近景に描かれた裸体の蛇使いの女の向こう側に重厚な壁がある。その壁面全体に、水のように透明感のある繊細な青が塗られていた。ただ率直に感嘆してしまう色彩には、美術館に足しげく通ってもなかなか出会えるものではない。クラーク夫妻は青を好んだだけでなく、青を見る目があったのだと実感した。

ルノワール、ドガ、モネ、ピサロの作品が目立つ中で、一点だけ展示されている画家たちの作品も気になるものが多かった。ドーミエのコミカルな油彩《版画収集家たち》、自宅の庭師をボヘミアン詩人のように魅力的に描いたカロリュス＝デュラン《画家の家の庭師》、歪んだ花瓶の曲線と水の透明感で人目を引くマネ《花瓶のモスローズ》、そして最後に展示されるボナールの《犬と女》には目に心地よい色彩、構成とデフォルメがある。

「奇跡のクラーク・コレクション」展は良作が多く、純粋に絵を楽しめる展覧会だった。会期は5月26日までと長いが、せっかくなら自分のペースでじっくり見られるように、混雑する終了間際は避け、早い時期に行くのを勧めする。

(2013年4月7日)

〔寸評〕ルーヴル美術館展—地中海 四千年のものがたり— La Méditerranée dans les collections du Louvre

- ・会場：東京都美術館
- ・会期：2013年7月20日～9月23日
- ・評者：岩瀬 慧

「ルーヴル美術館展—地中海 四千年のものがたり— La Méditerranée dans les collections du Louvre」は2013年7月20日～9月23日までの間、JR上野駅から徒歩7分の、昨年リニューアルオープンした東京都美術館で開催されており、高級感のある洗練された展示室で楽しむことができる。

「序 地中海世界—自然と文化の枠組み」「Ⅰ 地中海の始まり—前2000年紀から前1000年紀までの交流—」「Ⅱ 統合された地中海—ギリシア、カルタゴ、ローマ—」「Ⅲ 中世の地中海—十字軍からレコンキスタへ(1090-1492年)—」「Ⅳ 地中海の近代—ルネサンスから啓蒙主義の時代へ(1490-1750年)—」「Ⅴ 地中海紀行(1750-1850年)」の計6章構成になっており、さらに各章の下に細かく節が立てられており、綿密に構築されている。監修はジャン＝リュック・マルティネズ新館長、学術協力は高階秀爾先生、三浦篤先生で、主催には日本経済新聞社、NHK、NHKプロモーションが加わる。本展の最たる特徴は、ルーヴルの「古代ギリシア・エトルリア・ローマ美術」「古代エジプト美術」「古代オリエント美術」「イスラーム美術」「絵画」「彫刻」「美術工芸品」「素描・版画」の8美術部門すべてが横断的に参画していることである。壺、皿、スプーン、モザイク、彫刻、絵画など合計273点と大規模な展示になっており、鑑賞の際には時間配分に気をつけたい(要所のみで1時間、通常で2時間、じっくり観れば3時間はかかるだろう)。カタログも充実した内容になっており論文、解説に加え巻末の「地中海関連年表」と「地中海についての主な日本語文献」(ともに小池寿子、棚瀬沙和子編)まで付加しており、参照されるべきものである。

全体として、ある作家やあるテーマの芸術作品を集めた一般的な展覧会というより、地中海沿岸の文化からみる交流をテーマにした文明史展といった印象である。世界史の知識がある程度前提にはなるものの、テーマ設定が独自であるが故に今日の我々の眼に新鮮なものである。展示形式にも工夫が凝らされていることも重要だが、気になった作品を幾つか挙げてみよう。まず、《エウロペの神話》のテラコッタの壺は、既に古代ギリシアで発達していた身振りの表現の

優雅さに驚かされる。大陸（ヨーロッパ）の名前の由来となったエウロペはフェニキア（現レバノン）王の娘で、白い牡牛に姿を変えたゼウスに連れ去られた。東方に由来するものとしてのギリシア観であり、両者の深い繋がりを表している。独立独歩に発展したギリシア文明という歴史認識の誤りに陥らずに済む。他にも《ひげのある男の顔の形をしたペンダント》や《魚形アリュバロス（小型の香油入れ）》など、日々の生活を彩り、楽しませてくれる「モノ」は眺めるだけでも飽きが来ない。300年頃の床モザイクは文字通り床に貼られたものを見下ろす、という実際の配置に近い形式での展示は見逃せない。

次に《ローマ皇帝ルキウス・ウェルスの子ルキッラの巨大な頭部》は160cmの頭部（！）というその大きさにまず圧倒される。しばらく眺めていると、「こんなに大きな頭部を作らせた皇帝は、一体どういう気持ちだったのだろうか？」という疑問が湧いてくる。皇帝が妻を慕う気持ちの現れなのか、時空を超えて彼女の美貌を留めおくためなのか。整った目鼻立ち、大きな眼、正面をまっすぐ見据える女性としての強い性格、大理石は細部にいたるまでさまざまことを物語っているようだ。また、交流の主眼を置いた展覧会、という意味では、《キリストのモノグラム IHS が記された大皿》は、15世紀イスラーム陶器がラスタール彩で IHS（イエスのギリシア名の省略形）を書き入れている点は興味深い。《東方と西方のキリスト教会統一の象徴である教会を支える、聖使徒ペテロとパウロ》の絵画もまた、本展のテーマを如実に体現している例である。最後に、画家のアントワーヌ＝アルフォンス・モンフォールによる《シリアの馬》（1837年）は、馬の黒鹿毛に眼を奪われる。馬、牛などの動物は本展を通して重要なモチーフであり、それぞれの表現の異同に注目してほしいものである。文化は独立して生まれてくるのではなく、相互の関係性から生み出されるものであり、その実態を4000年の歴史から「地中海」を固定点としながら俯瞰する本展の試みは、功を奏しているといえるだろう。

見学後は東京芸大の間を通り過ぎ、言問通りの信号を渡った角にある「カヤバ珈琲」で休憩するのがよい。2階に上がると座敷になっており、イサム・ノグチのコーヒーテーブルでみつ豆をいただきながら涼を取りたい。

(2013年8月2日)